國學院大學学術情報リポジトリ

ネット社会における実況系ネットロアの伝播と活用：「口裂け女」と「きさらぎ駅」の比較から

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-07
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 古山, 美佳
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001458

ネット社会における実況系ネットロアの伝播と活用

―「口裂け女」と「きさらぎ駅」の比較から―

古山美佳

論文要旨

本論文は、現代日本において怪異が伝播過程で受ける影響、発展の後に再生産・再活用される様子を考察することで、現代における怪異の在り様、怪異と分離不可避な民俗的・宗教的要素の知識がどのように取捨選択・蓄積されて来たのかを明示するものである。

本論では、ネットロアの研究対象化について述べた後、口裂け女と比較する形で、「きさらぎ駅」の怪異の伝播過程を概観する。ここでは、口裂け女の伝播で主要な役割を担った新聞・雑誌というマスメディアは、「きさらぎ駅」では殆ど関与していない点が確認された。現在、ネット社会を舞台として、怪異の表象のされ方、知識の再生産・需要の在り方に変化が見られる。それは伝播速度・範囲・知識の方向性、そして活用に見ることが出来る。伝播過程における様々なネット上のツールとの親和性も、その特徴であると考察される。また、口裂け女、「きさらぎ駅」共に、怪異は、場所性・非場所性の差があるものの、人を呼ぶものとしての位置付けが顕著である。

一．問題の所在

本論文の目的は、現代日本の中で怪異の物語がその伝播の過程で受ける影響、発展の後に再生産・再活用される様子を考察することで、現代における怪異表象の在り様と、怪異と分離不可避な民俗的・宗教的要素の知識がどのように取捨選択され蓄積されて来たのかを明らかにすることである。

筆者は、現代日本において、日本人の宗教的な感情の発露が如何にして表象されるのか、その一端を掴みたいと考えている。その対象として、怪異つまり合理的な思考では理解出来ない事象を対象として研究を進めている。

本論文においては、都市伝説、或いはネットロア[1]（インターネット上で流通している説話）の一つである「きさらぎ駅」を題材として考察を進める。様々なネットロアの中から、「きさらぎ駅」を選出した理由は、まず実況系怪異であることから、従来の怪談話の話し手／聞き手の関係とは異なる表象・知識の提示が見られるのではないかと仮定した点にある。他の有名なネットロアは、「八尺様」「コトリバコ」「裏S区」等があるが、いずれも投稿者が過去に体験した、或いは聴いた怪異を、掲示板上で語るという形式が取られていた。それ故に、伝承の媒体が口伝や書籍とは異なっているものの、本質的には話し手＝情報伝達者／聞き手＝情報受容者の形式が固定された状態であったといえるだろう。

ネットロアの中心的なツールでもある掲示板は、相互に意見交換が出来る場の特性から、語られる話の途中で質問を挟んだり、語り後に様々な考察を入れたりすることは可能でも、その怪異は既に終わったものである。高野誠司は、都市伝説を例として、「〔話す者も聞く者も「危害を実際に加えられること」から隔たった場所にいる〕が故に、娯楽としての恐怖物語を得て「怖がりたい」という欲望を叶えている[2]」としたが、前述したネットロアも同様であるといえる。

一方、「きさらぎ駅」は、高野のいう「物語が進行しつつある出来事を目前にしての報告ではない点[3]」と異なることから、一考する余地があるのではないかと考えた。また、高野の考察は、「きさらぎ駅」でも、現在に残る多数のまとめサイトや考察サイトに出入りする人々には当て嵌まる論でもあることを忘れてはならない。

つまり、現代の怪異表象はリアルタイムの体験・進行と後日其の出来事を閲覧する人々の二重構造になっていると考えられる。それとあわせて、怪異の活用という現代の現象を対象として考察を進めていく。

二．ネットロアの普及

ネットロアの登場は、インターネットそのものが多く利用されるようになったこと、そして同時にインターネット空間（web上）が様々な話や情報を書き込む場として捉えられたことを大前提としている。

三上俊治は「インターネットと流言」[4]において、インターネット上のニュースグループやチャットルーム等を、「管理者を持たない無政府状態である」とし、匿名による情報発信が可能であることを示した。それ故、今後、web上は、流言発生の格好の温床となるであろうことと、他のメディアに比べて、流言の伝播スピードが速いこと、地球規模の伝播範囲を持つこと、伝達過程における情報の歪みが記憶変容（忘却）ではなく意図的な情報付加や修正によって生じることを指摘した。

二―一　日本におけるネット社会の浸透

本項では、日本におけるネット社会の広がりを端的にではあるが確認する。

『ケータイ社会論』[5]文末に付記される移動体メディア関連年表[6]によれば、一九九四年をインターネット元年としたことを始まりとして、一九九九年には大型電子掲示板「2ちゃんねる」、二〇〇四年にはSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）の「ミクシィ（mixi）」・「GREE」が共に開始され、後の二〇〇八年には、「Twitter」日本語版及びSNS「Facebook」が日本で開始されている。このことは、比較的簡単にネット社会にアクセス可能になった事実を意味すると共に、個人が様々な情報の発信者として確立したことをも意味している。また、同時期にYoutube、ニコニコ動画、Instagram等、写真や動画を個人が簡単にweb上で公開することが可能になったため、文字・写真・動画という各種の情報を受信するのみならず発信することが身近となったといえるだろう。

ツール面でも、二〇〇三年以降には、携帯電話各社がパケット通信料の定額サービスを次々に開始し、携帯電話によるインターネット利用が容易となった。料金定額化による影響は、従来パソコンをメインツールとしていたメールやチャット、或いは掲示板といった機能、具体的にいえば前述したSNSを始めとしたサービスを個人が何処からでも利用可能となったことを意味する。

これらのサービスは、自己の体験・思考をweb上へ自由に発信することを容易にしたと考えられる。

二―二　ネットロアの興隆と研究対象化

前項までのネット社会の広がりを前提として、ネットロアを含んだ都市伝説とメディアについては、飯倉義之が「都市伝説とメディアの変遷―都市民俗・ネットロア・SNS―」[7]で論じており、都市伝説という語について日本における変容や商業メディアの影響、同時代の世間話研究や流言研究を概観した後、web時代とネットロアの動向を整理している。

同論文によれば、一九九〇年代後半には個人のホームページや大型掲示板を場として、怪談や都市伝説を集めて考察するサイトやスレッドが開設され人気を博し、二〇〇二年以降人気ホームページの書籍化やその著者による新聞や雑誌へコラムやコメントの発表が始まるようになったとされる。また、同時期である二〇〇〇年前後にweb独自の怪談・都市伝説が生成されたと述べられている。

この都市伝説・ネットロアの公開の現状に対して、伊藤龍平は「『探偵！ナイトスクープ』の「謎のビニール紐」―電脳メディアの技術史とネットロア―」[8]において、インターネット上の噂や怪談といった、ネットロアを蒐集する人々の事をネット上のフィールドワーカーと呼ぶべき存在とし、ネットロアの伝承者として注目していると述べている。

都市伝説と呼ばれ流通した旧来の怪異の物語は、ネット社会においてweb上という世間話の再生産・再登録の場を得て人々の眼前により広く示されたといえるだろう。一方で、ネット上の書込みを起源とする新しい都市伝説、ネットロアも同時期に登場して来た。

後者のネットロアを具体的に扱った研究の中では、怪異を対象とした事例は、余り多くないというのが現状である。先にも引用した伊藤龍平によって、二〇〇八年・二〇一四年にはくねくね[9]、二〇一三年には八尺様[10]が論じられたのを代表として、米津海は、卒業論文「インターネット都市伝説の架空性と領域」[11]にて、杉沢村伝説、くねくね、「きさらぎ駅」を取り上げ、その場所を主眼として考察を進め、伊藤慈晃[12]は、2ちゃんねる自体の「怖い話」の投稿の定量分析を「死ぬほど洒落にならない怖い話を集めてみない？」（略称・洒落怖）というオカルト版スレッドを題材に行った。本研究と近接するものとしては、広田すみれ・高木淳の「インターネット上でのネットロアの伝達と変遷過程」[13]があり、「死ねばよかったのに」のパターン化と変容を考察した。

以上が、ネットロアの先行研究として散見されるものである。

伊藤龍平の論文は、二〇一六年に加筆修正後、『ネットロア　ウェブ時代の「ハナシ」の伝承』として書籍化して出版されたが、ネットロアを中心的に取り扱った研究は未だ少なく、研究分野としては発展途上であるといえるだろう。その原因は、ネットロアのネットロアたる由縁である、ネット社会がその話の発生元であり、発展場所であり、保存される場所であることに起因する。

詳細は後の各章にて述べるが、ネットロアの中でもネット社会生まれの都市伝説は、新聞は勿論のこと、雑誌記事としても中々掲載されない傾向にある。今回対象とする「きさらぎ駅」は、その傾向が特に顕著であることも含め、以降で論じて行きたい。

本論文では、口承や噂の中で成長していった「口裂け女」とネットロア「きさらぎ駅」の伝播・発展とを比較する形で考察を進めていく。後者「きさらぎ駅」に関しては、先行研究が殆ど存在しないこと、情報源の多くはネット上にしか存在しないことが、研究対象として中々取り上げられなかった要因であるといえるだろう。

インターネット上の情報は、半永久的に保存可能であり誰でも閲覧できるという認識・常識は既に崩壊し、掲載サイトの都合や掲載者個人による削除・非公開が容易である点から、情報源としては弱いという難点も存在する。一方で、後述するようにネット社会から生まれ、発展したネットロアの中には、多くの人々の関心を集めるものは少なくない。

ネットロアという一面においては酷く希薄ではあるが、現代日本との親和性の高い本題材を用いて考察を進めることは、今現在という二〇〇〇年代以降の社会的文化的特徴を見出すことが出来ると想定し、この価値を明らかにするために本論を進めていく。前述したように、ネットロアはその特性から、ネット上の情報源に頼りがちになることをここで断っておく。

三．怪異の伝播―一九七〇年代と二〇〇〇年代―

本章では、一九七〇年代後半に大流行したとされる「口裂け女」と二〇〇〇年代に生成され、現在もなお再生産を繰り返しているネットロア「きさらぎ駅」、それぞれの概要と伝播過程について概観し、特に伝播媒体としてマスメディアがどのように関与・影響したのかという点に着目して考察を行う。

今回対象として用いるマスメディアは、新聞記事、及び、雑誌記事を中心とし、映像メディアは、その範囲としないものとする。

三―一　一九七〇年代：口裂け女という都市型怪異

口裂け女は、一九七九年頃より日本全国で語られた都市伝説であるとされる。

口裂け女という怪異は、容姿・行動・撃退法等に様々なバリエーションがあるものの、概ね左記のような部分が共通している。

子供達は、マスクをした女性から「わたし、きれい？」と聞かれ、答えなかったり「きれい」と答えたりすると、その女性はマスクを外し、耳まで大きく裂けた顔を見せつけ、「これでもか」といいつつ子供達を追い掛け回す。

野村純一は、これら口裂け女の噂を一九八一年以後三年間女子学生からの直接回答によって蒐集し、その口裂け女の噂話の資料一二〇〇例を用い分析を行っている。[14] 同調査では、口裂け女の噂の全国への伝播速度と口裂け女の移動速度の速さの関係や、噂の結果、口裂け女の造形化が進められたとし、その根底には、姿を具象化し特定しようとする動きがあり、同時に三姉妹そして末っ子の口裂け女像が見られるように変化したとしている。

他にも、口裂け女を研究した文献には、木下冨夫「現代の噂から口承伝承の発生メカニズムを探る―「口裂け女」を題材として」[15]や廣井脩『流言とデマの社会学』[16]所収「第二章　流言と構造」内の浸透流言の事例として取り扱ったものが存在している。全体的に、口承文芸や流言研究からのアプローチが見られるといってよいだろう。

廣井脩は、口裂け女の流言が流行した理由を以下のように述べる。

（前略）子供たちの、恐怖と好奇心の感情を強く刺激したからだとはいえるだろう。つまり、子供たちは、こうした話に恐怖しながらも好奇心を押さえきれず、相手のこわがるのを楽しみながらこれを伝え、あるいはかたずをのんで話に耳を傾けたのである。[17]

両名の調査結果・考察を見るに、一九七〇年当時の口裂け女は正しく口承を中心とした都市伝説として伝播していったことが解る。野村純一の聞き取った口裂け女の噂を共有した時代の学生の話からは、口裂け女の噂が僅か数ヶ月で全国の至るところで囁かれたさまが見て取れる。その情報の速さに類推されてか、或いは伝播過程での記憶変容によるものか、情報の速さは口裂け女の足の速さと変容して行った点も、あわせて見受けられる。

このような、噂の変容・成長に関しては、次章にて詳細を論じるものとする。

三―二　二〇〇〇年代：「きさらぎ駅」というネット型怪異

「きさらぎ駅」とは、2ちゃんねる発祥の都市伝説、つまりネットロアの一つである。

本項では、始めに「きさらぎ駅」とは如何なるものなのかを概観する。

話の初出は、2ちゃんねるオカルト板（2ちゃんねる掲示板の一つ）『身のまわりで変なことが起こったら実況するスレ26』[18]（98～635スレ）にて、「気のせいかも知れませんがよろしいですか?」（04/01/08 23:14）と書き込まれたことである。ここでいう「スレ」は、「スレッド」の略称であり、スレッドフロート型掲示板を意味するため、特定の話題に関する投稿が集まった頁のことを指すものである。

この「きさらぎ駅」は、投稿者「はすみ」と閲覧者のやりとりは約五四〇スレッド、時間にして五時間三〇分近くに及んだ。また左記は、「はすみ」から提供された怪異との遭遇の様子をまとめたものである。

書き込んだ人物は、はすみ（葉純）◆KkRQjKFCDs（以降はすみ表記とする）と名乗り、新浜松駅から乗車した静岡県の私鉄の様子が普段と異なっていることから不安に思い、、その相談を掲示板に記して行く。内容は主に自身や周囲の状況説明と閲覧者のアドバイスが中心であった。

まず、普段は七～八分で止まる電車が二〇分以上止まらないことや周囲の乗客は皆寝ていることが書き込まれる。その後、「きさらぎ駅」という聞いたことも見たこともない駅に電車は停車する。はすみは、電車から降り、そこが無人駅であり時刻表も見当たらないことを確認する。電車に戻ろうとするが、丁度電車は発車して仕舞う。タクシーも公衆電話も見当たらず、両親に（携帯電話で）電話するも「きさらぎ駅」の場所が解らないらしい。

線路に沿って歩きつつ、両親からの電話を待つと宣言の後、iモードのタウン情報で現在地を調べてもエラーが出ることなどが報告される。遠くの方で太鼓を鳴らすような音とそれに混じって鈴のような音が聞こえていることが書き込まれ、更には「嘘だと思われるかもしれませんが、怖くて後ろが見れません。駅に戻りたいのですが、振り向けません。」、「おーい危ないから線路の上歩いちゃ駄目だよ」と叫ばれ、振り返ると一〇m位先に片足だけのおじいさんが立っていたが、消えて仕舞い、恐くて動けない旨などが報告される。太鼓と鈴の音が接近してくる中、漸く「伊佐貫トンネル」に到着したと報告が上がる。

トンネルを通過すると人と出会い、近くの駅まで送るといわれついて行く。その人に現在の場所が「比奈」（静岡県富士市に実在する地名）と教えられるが、はすみは絶対にありえないと投稿する。

その後、どんどん山中へと向かって行くことと、独り言を呟く相手に対し不審に思った為、隙を見て逃げることが宣言される。(04/01/09 03:44)

以降、投稿者による書き込みはなかった。

この「きさらぎ駅」は、NAVERまとめの[19]【閲覧注意】ベストオブザベスト怖い話まとめ【最恐の怖い話】一七話の中で、「【閲覧注意】ベストオブザベスト怖い話3「きさらぎ駅」」[20]として取り上げられている他、Googleで「きさらぎ駅」を検索すると、実際には存在しない駅名であるにも関わらず、約三二七〇〇〇件が挙げられ、時折Twitter上でもトレンド入りする程、断続的に話題として登場していることが確認出来る。

ここでも見て解るように、「きさらぎ駅」という怪異の伝播の中心はネット社会である。現在では、NAVERまとめサイトでは「きさらぎ駅」のまとめが四五件ヒットする。

二．ネットロアの普及にて、三上俊治が一九九〇年代後半に抱いた指摘は、恐らく拡大する形で現代のネット社会を指す内容であるといえるだろう。ネットロアを含めた情報の伝達速度は、既にタイムラグが殆どなくなり、知りたいこと、知らせたいことはリアルタイムで人々の間で共有されるようになった。一方で、ネット社会にその情報が留まり続け、その広い反面、積極的に関わろうとしない者には、情報を発信出来ないという難点も見られるようになる。

次項では、口裂け女と「きさらぎ駅」という二つの怪異とマスメディアがどのように関わって来たのか、また、その影響力の有無を見て行く。

三―三　マスメディアとの関わり

先の口裂け女という怪異は、表一から解るように、初めてメディアに登場した一九七九年頃から現在に至るまで、断続的に取り上げられて来た。具体的に記事が増加した時期には、どのような取り上げられ方をしたのか、以降で確認を行う。

一九七九年を起点とした記事では、口裂け女自体がどのような怪異であるのか、また、その対処法について、子供達からの聞き取りを元に特集されたものや、口裂け女の噂の伝播と重なる形で、口裂け女という都市伝説の移動ルートを地図に書き起こしたものが目立つ。このことから当時、口裂け女という存在の影響力が大きかったであろうことが解る。特に顕著なのが雑誌記事であり、口裂け女のイラストを用いて、一九七九年の一年間には、四九誌の雑誌に掲載された。注目したいのは、この記事の掲載された雑誌の主要読者層である。具体的に掲載誌を挙げてみると、『週刊女性』『週刊朝日』『週刊文春』のように、初期の口裂け女の話の媒介者である子供やその保護者、教員から拡大して、青少年にまでその情報が流通して行ったと考えられる。雑誌『微笑』[21]では、口裂け女の読者証言を募り、手紙類だけで七〇三通、特捜班の専用電話も鳴りっ放しだったという。その投稿者も中学生・高校生に混じって、三六歳主婦・四八歳商店主も口裂け女の話を知っていると投稿し、三〇歳会社員に至っては、自身の遭遇体験を語ったとされる。

最初期の一九七九年以降、口裂け女の記事は新聞各社・雑誌各誌共に断続的に掲載されている様子が窺える。二〇〇〇年前後から記事の数の推移を見るに、都市伝説の再流行の流れと結合し、紙面に戻ってきたと捉えることが出来るだろう。

表１　各新聞社と雑誌における「口裂け女」記事

	朝日	毎日	読売	各種雑誌		朝日	毎日	読売	各種雑誌
1979年	5	1	18	49	1999年	1	2	0	1
1980年	0	0	1	2	2000年	5	4	10	1
1981年	0	0	0	1	2001年	1	2	1	0
1982年	0	0	0	0	2002年	4	0	1	4
1983年	0	0	0	0	2003年	6	1	3	5
1984年	0	0	0	0	2004年	0	2	2	3
1985年	0	0	0	0	2005年	1	1	1	2
1986年	1	0	0	2+1	2006年	1	3	3	0
1987年	1	0	2	1	2007年	28	3	3	8
1988年	2	0	1	0	2008年	8	0	3	2
1989年	2	0	0	1	2009年	2	1	1	2
1990年	1	0	3	4	2010年	1	2	0	2
1991年	0	0	2	0	2011年	1	2	1	0
1992年	1	2	1	1	2012年	4	3	5	2
1993年	3	1	1	1	2013年	1	0	2	0
1994年	4	2	3	0	2014年	6	3	2	1
1995年	1	3	2	0	2015年	5	1	4	2
1996年	1	2	2	0	2016年	6	5	1	3
1997年	1	2	1	0	2017年	2	2	1	0
1998年	2	0	1	0	計	108	50	82	98

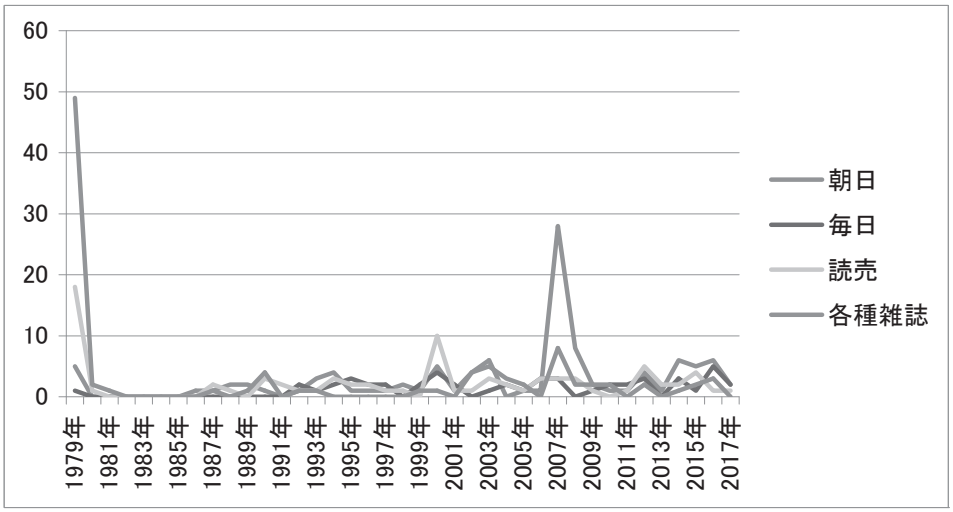

図１　各新聞社と雑誌における「口裂け女」記事

二〇〇七年の毎日新聞に異常なほど記事が集中しているのは、映画『口裂け女』に関わるシネマ情報が大半であり、二〇一二年以降の記事の増加は後述する五．怪異の活用で詳細を論じるものとする。

一方で、ネットロアとマスメディアの関わりについては、意外な程結びつかない。朝日新聞・毎日新聞・読売新聞などの新聞においては、「きさらぎ駅」のみならずネットロアという言葉すら、先に事例として挙げた伊藤龍平の『ネットロア　ウェブ時代の「ハナシ」の伝承』に関する紹介記事[22]のみである。正確には、「くねくね」や「八尺様」（検索時「八尺」）は、読売新聞検索では、それぞれ四四九件・一一八件という数字が表示されるものの、実際の記事内容としては、前者は擬音として用いられたものが多く、後者は旧来の大きさの表記として書かれており、ネットロアとしての記事は実質存在しないことが確認された。

また、大宅壮一文庫雑誌記事索引検索にて、「きさらぎ駅」「くねくね」「八尺様」などを入力しても、記事としては殆ど挙がって来ない。キーワードを「現代の怪談」として検索し、その中からネットロアを抽出する作業が必要となった。これは、口裂け女に比べて圧倒的に記事が少ないことを示唆していると考えられる。

他にも、国際日本文化研究センター[23]にて「怪異・妖怪絵姿」「怪異・妖怪画像」「怪異・妖怪伝承」のデータベースがそれぞれ作成・公開されてもいるが、「怪異・妖怪伝承」では、「民俗学の調査などをとおして報告された怪異・妖怪の事例についての書誌情報」を内容の主軸としている為か、「口裂け女」の伝承は六〇件登録されている反面、ネットロアに関するものは現在も未登録である。

ネットロアは、創作の可能性が高いということは、マスメディアに忌避される理由にはなりえないだろう。何故なら、比較対象として取り上げている口裂け女も、全国的に登場した一九七九年の同年夏季には、伝聞の証言が多いことからも創作であることは雑誌記事上でも明記されるようになっていた。

前述した条件があるにも関わらず、「きさらぎ駅」を始めとしたネットロアがマスメディアに取り上げられない理由は、恐らく調査対象が判然としないことと、ネット社会にはアンチマスコミ的な風潮、陰謀論が囁かれていることにも関係があるのではないだろうか。

後者に関しては、飯倉義之「都市伝説化する「想像力」:「大きな物語の喪失」と陰謀論的想像力」[24]が詳しいが、一般書籍にもweb上の都市伝説等を紹介する中で、マスコミは真実を隠蔽しているといった言説は後を絶たない。

ここには、研究者が想定した都市伝説と、商業ベースに乗せられ芸能人や大型チェーン店のスキャンダルなど、「ウケる話」を何でも内包した都市伝説の差異から生じたものであると考えられる。

四．怪異の変容と知識の獲得そして浸透

口裂け女も「きさらぎ駅」も、その伝播過程で変容を迫られたことは、その本質が流言であることからも容易に想像出来るものである。その伝播過程においては、様々な知識が付与され、或いは書き換えられて、現在の口裂け女像、「きさらぎ駅」像が再構成され、伝達されていったことが予想される。

四―一　一九七〇年代：口裂け女の進化

口裂け女に関しては、雑誌記事初出の『週刊朝日』では、噂の拡大と具体的なエピソードの追加（三人姉妹・足の速さ等）が、一九七九年三月の時点で公言されている。

これら口裂け女の在り方、変化の様子は野村純一[25]によると左記のようにまとめられる。

これ（口裂け女）の内容が整って子供たちの間に受容されるに至ったその過程には、どうやら媒体としてのマスコミの介入が不可欠の要素として存在するようである。これを要するに、昨今の噂とか噂話というのは、発生と同時にその多くが時宜を得ていちはやく、マスコミの話題として喧伝され、そして次にそれが還流して再度、巷に帰ってくる。したがって、その間、そこでは必定、話の再生産とか再整備、もしくは新たな一種の増殖作用といったことが行われるのであろう。（括弧内筆者）

また、同説によれば、口裂け女の変化は民俗学的な様相をまとって変化していったとされる。それは、捕まりそうになった時に行うポマードやべっこう飴を三度投げる行為が付け加えられたことにより逃竄譚のパターンが盛り込まれたこと、詳しく述べるとすれば、説話や物語の世界で呪具、呪文は一般に三回唱えるのが普通という定型が採用されたことを指している。

四―二　二〇〇〇年代：「きさらぎ駅」の積み重ね

三―三．マスメディアとの関わりで確認したように、「きさらぎ駅」はマスメディアと余り接点を持たないという特徴があるが、それは他者への伝播が希薄であるということには決してならない。特に二〇一一年以降夏期から顕著にその傾向を見ることが出来る。

主にTwitter上で「きさらぎ駅」に迷い込んだという実況が上がるようになるが、その大半が興味本位や話題作りのための虚偽であることが投稿者本人による発言や、投稿された写真等の矛盾点を閲覧者に疑問視されることによって判明している。尤も、ネットロアに限らず、都市伝説や怪談の真偽を論じることは、本論文の主旨とは外れるため行わないものとする。

本項では、繰り返される「きさらぎ駅」という怪異との遭遇話から何が生み出されたのかを考察する。

注目するのは、「きさらぎ駅」に関する知識の積み重ね、或いはリメイクの現状である。現在、最初に「きさらぎ駅」に迷い込んで仕舞ったという三―二．二〇〇〇年代：「きさらぎ駅」というネット型怪異で見た投稿は、既にまとめサイトにしか存在しない。

複数のまとめサイトが怖い話や都市伝説のベスト〇という形で再蒐集・再掲載を繰り返しているが、それだけでは、人々の話題として出続けることは出来ないだろう。ここで重要となって来るのは、「自分も「きさらぎ駅」に迷い込んだ」という新しい投稿である。

先に述べたように「きさらぎ駅」に来たと実況する実況者の中には、投稿した写真が実在する別の駅のものであった点などを理由に早々に釣りであることが指摘され[26]、有耶無耶の内に話が終息する場合や、無事に帰って来られたとした後に釣りであったことを申告する投稿者なども多く見受けられる。現在確認が取れるだけでも、二〇一一年八月@radio_buna、二〇一六年二月LTドライバー@toikoh9114[27]は、投稿写真が原因で「偽」であると断定された。また、二〇一四年一月成沢/Nary@nrmrncnc（2014.01.05 22:49）[28]、二〇一五年八月ななもり@F4@love_nkun[29]はそれぞれ自身が釣りであることを宣言した事例となる。

ネット社会において、偽の怪異との遭遇、即ち釣りであることは、必ずしも無意味であるとはいい難い。それは、偽＝釣りを疑われたり、判明したりしてもTwitterのトレンドに入り、そのタイムラインを見た「きさらぎ駅」を知らないユーザーもNAVERまとめや都市伝説蒐集・考察サイト[30]を閲覧し、再度その怪異表象が情報として再生産され、人々の目に触れる契機となるからである。

然しその一方で、彼らを含めた新しい「きさらぎ駅」の実況が、初期の「きさらぎ駅」には無かった要素として再蒐集・再編成されて、ネットロア「きさらぎ駅」を形作っていることもまた事実である。

「きさらぎ駅」の全体像が如何なるものか、その全貌を推し量ることは難しい。発生当初より、研究者・雑誌問わず、多くの事例や考察が集められた口裂け女ですら、その全体像を掴むことは難しく、今もなお、無数のヴァリアントを所有していることからもそれは明らかである。

「きさらぎ駅」の場合、実況系怪異である故に、リアルタイムに様々な人々からの意見や助言が入り混じる。閲覧者は、以前の「きさらぎ駅」の投稿内容を読みそれを元に助言をするが、時には出典の明らかでは無い、場合によっては理由もない情報が共有・信用されることも行われる。伊藤龍平[31]は、「急テンポでレスが積み重ねられていく「オカルト板」のスレの場合、閲覧者はある程度の予備知識がないと、話題に入れない。」と指摘する。

「きさらぎ駅」のネットロア群で共有される知識は、投稿者による現場の状況に対応して、閲覧者が既に持ち得る知識の提供と、その場でネット検索を用いて調べた情報の二通りが想定される。つまり、実況型のネットロアは、従来の話し手たる投稿者（実況者）・閲覧者・web上の知識によって再構成されているのである。

四―三　「きさらぎ駅」に見られる知識の共有―実況される怪異

これまで見てきたように、「きさらぎ駅」という怪異は、掲示板やTwitterといったリアルタイムで双方向的に情報交換がされる場所において登場し共有されてきたものである。

他のネットロアである「八尺様」「コトリバコ」（それぞれベストオブザベスト怖い話の一つ）では、同じweb上でも、長文を書き込める大型掲示板が主な場所であり、どのような怪異と出会ってしまったのか、どのような行動をしたのかという内容が過去にあった事実として語られ、その語りの行間で無名の閲覧者からのレスポンスが入るという、どちらかといえば、口承の場をインターネット上に移したものであるといえる。この傾向に関しては、先に取り上げた伊藤龍平[32]が「電承」という語で以て考察を進めている。

一方で、基本的に「きさらぎ駅」は、現在進行形でその怪異との遭遇の様子が書き込まれ、閲覧者と同じ時間軸において「きさらぎ駅」に迷い込んでいることを前提とした実況形式が取られている。この傾向は、二―一．日本におけるネット社会の浸透でも見たように、各種webサービスの発展と、スマートフォンという誰でも何処からでも文字投稿のみならず、動画投稿が容易になったことと無関係とはいえないだろう。あわせて、二〇〇六年以降に「ひとりかくれんぼ[33]」が大流行したことも大きく影響していると考えられる。

ひとりかくれんぼは、降霊術の一つとして2ちゃんねるに詳細な方法とあわせて投稿されたものである。他のネットロアと異なり、こっくりさんのように、誰にでも実行が可能であることから、多くの人々が体験談や実況を行い、現在もなお新しい投稿が挙げられる。

当時、2ちゃんねる等の掲示板を、主な投稿の場としていたが、ネット社会の発展に伴い、TwitterやYoutube、ニコニコ動画と結び付いて実況や実況風動画という形で、自身の体験した怪異を人々に広めていった。端的にではあるが手順を左記する。

準備：ぬいぐるみに名前をつける（仮称・×××）

中の綿を全て取り出し、同量の米と自分の爪を入れる

赤い糸で縫い合わせ、残りの糸を巻き付ける

実行：ぬいぐるみに「最初の鬼は〇〇（自分の名前）」と三回いい、水を張った浴槽にぬいぐるみを入れる

家の中の照明を全て消し、テレビを砂嵐画面でつけ、目を閉じて一〇秒数える

刃物を持って風呂場へ行き「×××見つけた」といってぬいぐるみを刺す

部屋へ戻り、押し入れ等に隠れて室内の様子を伺う

ひとりかくれんぼでは、ぬいぐるみ側が鬼である時におこるとされる怪奇現象が人々の関心の中心である。その様子を文字や動画で報告する／報告されることが、このネットロアの醍醐味であるとされる。この時点でネットロアの実行や遭遇は一つのエンターテインメント化して来ていることが見受けられる。

結果として、実況者は周囲の状況や自分の行動を投稿し、同時間に閲覧者からの助言や知識を受け取りながら、行動決定を行う。それは即ち、閲覧者も同時に情報発信者になれるという雰囲気を作り出すことに他ならない。実際のところ、現場で実行或いは遭遇している（とされる）人物は、実況者本人しか存在しないため、行動の決定権は本人以外にないが、閲覧者は自分の書き込んだ情報が役に立つのか、これからどうなるのかといったことをリアルタイムで見ることでより臨場感を得ていると共に、後に見ることとなっても、物語以上のリアリティで以て追体験的に接する怪異の存在が確立したと考えられる。

木村弘之は、これらの事象を「投稿という形態による都市伝説は、すでに、投稿ゲームというひとつのゲームになってしまっている」[34]と指摘する。如何に閲覧者を集めるかという投稿ゲーム化している一方で、新しい怪異や民俗的宗教的対処法をあわせて人々に情報提供していることも忘れてはならないだろう。以上の流れを土壌として、「ささらぎ駅」はTwitterという場を主な舞台として再登場した。また、「ささらぎ駅」はネット社会において自己増殖・知識の取捨選択が行われていることが解る。

追加・上書きされる知には、一定の方向性を見出すことが出来る。「ささらぎ駅」においては、やみ駅ささらぎ駅かたす駅[35]として二〇一一年に投稿された記事を一例として挙げる。同話は二〇〇五年暮れの体験として、他のネットロア同様に過去の時間軸の出来事を語るものであった。

投稿内容を見てみると、「皆寝ていて不自然」な感じ、「肌で感じる奇妙さ」等感覚描写が整えられ、「ささらぎ駅」自体の描写も古い日本建築の駅舎であることが明記され、ホームの一部にしか屋根がなく、傘を持った人が結構いたが、不思議と誰も乗り込んで来ない等と詳細になり、初期の「ささらぎ駅」では書かれていないとされた前後の駅に関しても、大きな立札に前の駅『やみ』と、後の駅『かたす』という駅名が、平仮名で書いてあることが報告された。これは、後に閲覧者にも指摘されているが、やみ＝「黄泉」、かたす＝「根之堅州國」と見ることが出来る。つまり、『古事記』に基づいた日本的な知識の追加であると考えられる。

もともと、初期のきさらぎ駅のはすみによるトンネルを目指す描写は、イザナギノミコトの黄泉逃走譚に似ているという指摘もあったことから、『古事記』を知識のベースとしていることが伺える。

但し、リアルタイムにコメントを残し知識提供した閲覧者が、『古事記』を意識したか否かは不明であり、後日、他者による考察から判明したという形がとられている。同様に、飲食の禁止が指摘された事例も存在する。二〇一二年のものであるが、そこでは閲覧者が「ものを食べたら帰れなくなる」という旨を記述し、投稿者や他の閲覧者もホラーゲーム等で似た描写を見たとしてその知識を受容した。これは、『古事記』に限定せず、様々な神話で記述される「冥界下り」系で見られる、黄泉や冥界で飲食をすると帰れなくなるという話の転用であるといえるだろう。投稿者・閲覧者共に、この神話を根拠としているという明示はなく、「何となく覚えがある」やゲーム・漫画を理由としているが、神話的知識が活用されている様が見受けられる。これは、口裂け女における三への民俗的な集約に比べれば、漠然としているものの、知識の追加・上書きの役割を担っているのではないだろうか。

或いは、初期のはすみの事例では、iモードのタウン情報によって現在地が不明なことが明示されたが、二〇〇五年以降の投稿では、携帯電話機能の発展に即する形でGPS機能がエラーであることが度々報告されるようになる。一〇年にも満たない間ではあるが、「きさらぎ駅」という怪異は時代にあわせた上書きもなされていると見てよいだろう。

他にも、既に釣りであると判明した投稿内容からの引用も、ネット社会には散見される。これは、早川洋行[36]が言説の伝播で指摘した第一言説が偽言であったとしても、その聞き手が真実あるいは真実として言説を受け取ったという説を取ることが出来る。

ネット社会においては、まとめサイト・考察サイト共に自身で必要な部分をコピー&ペーストして情報を蓄積・公開しているのであって、その過程において情報が意図的・結果的に変容して行くことが確認出来るのである。

五．怪異の活用

ネット社会と怪異は、現在の日本社会とどのような関係にあるのか、本章では口裂け女・「きさらぎ駅」の現在の在り様を確認する。

五―一　口裂け女の現在

口裂け女は、現在においても都市伝説の一翼をなす存在として、マスメディアにも漫画やアニメ、ライトノベルのような各種の創作物にも登場を繰り返している。例えば、都市伝説を集めた書籍『THE　都市伝説　THE URBAN LEGEND』[37]では、カラーページで紹介され、映像面でも二〇〇七年に『口裂け女』の題で映画化、翌年には『口裂け女2』も公開された。他にも、妖怪や怪談を取り扱う漫画や小説といったポップカルチャーにも著名な怪異の一員として度々登場して来た。

近年の新しい取り組みとしては、人を呼び込む要素としての「口裂け女」である。例えば、水木ロードには水木しげるデザインの口裂け女の像があるように、一種の観光資源・町おこしの文脈で活用されるようになったといえるだろう。

特に盛り上がりを見せているのは、口裂け女発祥の地の一つとされる岐阜市の柳ケ瀬商店街である。同商店街では、二〇一二年七月一三日に期間限定のお化け屋敷「岐阜柳ケ瀬お化け屋敷　恐怖の細道」がオープン[38]した。以降、二〇一三年[39]、二〇一五年[40]、二〇一六年[41]のそれぞれ同時期に開催されている。来場者は、二〇一二年約一八〇〇〇人[42]、二〇一五年一九〇〇〇人[43]、二〇一六年には約二ヶ月間で約一四〇〇〇人[44]が訪れたと各新聞社でも報じている。主催者吉村輝昭らは、口裂け女の話が流行した当時中学生であり、リアルタイムでその状況を体験した世代である。当時の柳ケ瀬には活気があったことから、地元にゆかりのある都市伝説「口裂け女」を活かしたプロジェクトとして開始され、人を呼ぶということを目的として発展して来た。

同取り組みは、二〇一六年に商店街アーケードへと広がりをみせた。通行人に口裂け女が近づき「私、きれい？」と脅かした後に記念撮影を、というものだが、お化け屋敷という個室から商店街全体へと範囲が広がったことは興味深い。何故なら、柳ケ瀬商店街全体が口裂け女という怪異を用いた町おこしに協力的、或いは一定の効果を見い出していると考えられるからである。

二〇一七年[45]には更に広がりをみせ、岐阜柳ケ瀬「恐怖の夏祭り」というイベントにおいて、「恐怖の細道」の肝試し、妖怪プロレスワールドカップ、口裂け女メイク体験ブース、口裂け女の歌謡ショー、口裂け女コンテストという口裂け女に関わる企画を多く取り入れたものが実施された。これらは、前年まで「岐阜柳ケ瀬お化け屋敷　恐怖の細道」と同様の主催・「やながもん」柳ケ瀬お化け屋敷製作委員会、共催・岐阜柳ケ瀬商店業振興組合連合会が行ったもので、柳ケ瀬商店街に隣接する金神社、金公園を舞台として行われた。

前年度までのお化け屋敷に限定した企画であったが、町おこしの意味合いをより強く意識したのか、岐阜柳ケ瀬「恐怖の夏祭り」では、JA ぎふによって地場産の枝豆、トウモロコシ、スイカなどを無料で配布するコーナーを設けたとされる。

五―二 「きさらぎ駅」の現在

「きさらぎ駅」は、そのサイトの量、検索された閲覧者数から考えるに、ネット社会においてそれなりの知名度・存在感があるとみて良いだろう。毎年のように「きさらぎ駅」へ迷い込んだという記事が表面化する他、前述した口裂け女のように、創作分野において活用されている点からもそれは顕著に見られる。

例えば、ガンガン online「はじまりの夜行列車」や、第三回 comicoDEBUSTCUP「呪われ男子の怪」[46]、小説投稿サイト小説家になろう「「きさらぎ駅」の駅長さん」[47]は、「きさらぎ駅」というネットロア自体、或いはその一部を作品に反映させるという方法で以てオリジナル作品として公開されている。小説や漫画というポップカルチャーに活用の道を見出されるのは、双方の受容者の属性が近接しているのではないかとも予想される。一方で、宮部みゆき[48]が新聞で述べたように、或る人々は、先の創作物の中でネットロアを知り、後程ネット上の話を検索するという動きも見られる。他のネットロア発の都市伝説に比べて、創作分野においても「きさらぎ駅」に関する作品は、ネット掲載が多いことも特徴として挙げられるだろう。

「きさらぎ駅」は、現在迄に六、七人（釣り含む）が体験したとされているが、その一方で、ピクシブ百科事典にも載るように様々な創作物のモティーフとして取り上げられている。それは図らずとも、「きさらぎ駅」の知名度を上げる事にもなっていると考えられる。

創作分野において更に見られるのは、二次創作を越え、三次創作への流入である。

例えば、pixiv においては、ネットロア「きさらぎ駅」をイラストとして描いたものも投稿されるが、人気の漫画・アニメ作品（東方 project、おそ松さん、刀剣乱舞等）のキャラクターがきさらぎ駅に迷い込み脱出するというテイストのイラスト・漫画・小説が複数件見受けられる。現在、「きさらぎ駅」のタグを用いた作品は、イラスト・マンガジャンルで七三件[49]、小説ジャンルで三七三件が確認出来る。

更に、ニコニコ動画では二〇一〇年頃より「きさらぎ駅」をタグとする動画の投稿は少しずつ存在したが、二〇一三年にクトゥルフ神話TRPGやろうずWikiにて「きさらぎ駅[50]」がシナリオとして投稿されてからは、そのセッションのリプレイ動画が数多く投稿された。前述したpixiv同様人気の漫画・アニメ作品と結び付き、某キャラクターが「きさらぎ駅」のシナリオを行うならばどうするかというリプレイ風の話を動画化した作品も多く見られる。

現在では、最も多い「きさらぎ駅」タグの動画再生数は二六〇〇〇回を越え、全体数としては二一一件の「きさらぎ駅」動画が投稿・公開されている。ここでは、イラストは勿論のこと、ゆっくりボイスといわれる音声ソフトや効果音等を用いて、より見易く「きさらぎ駅」を提供しているともいえる。

ここで指摘したいのは、既存の漫画・アニメ人気に便乗する形で、「きさらぎ駅」という怪異が度々人々の間で再生産・再確認され続けているという点である。

次に、特定の場所へ他者を呼び込む装置としての「きさらぎ駅」は機能し得るのかという点を考察する。

前項で見られるように、本論文における比較対象の口裂け女は、地域活性化の重要な要素として活用されている。その活用の契機は、当時の口裂け女の噂伝播者達が、地域おこしの中心的人物になり、また、日本社会において怪談・都市伝説・妖怪といった存在の全体的な知名度の上昇と人々からの興味の高まりが熟成された、二〇一二年であると考察される。

一方で「きさらぎ駅」は、発生起源とされる場所が特定されていない為、特定の地域の活性化を目的とした利用は不可能であると予想される。

ネットロアの中でも、例えば「杉沢村」「裏S区」のように、実際に惨劇があった場所を明示していない話であるにも関わらず、モデルとされた場所を特定し、実際に行ってみようという企画[51]はある。しかし、「きさらぎ駅」は、「非・場所化」し過ぎていて同ネット上にモデル駅考察の記事が散見されるに留まっている。

また、ネット社会における「きさらぎ駅」そのものの知名度を利用する動きも見られる。本章冒頭で見たように、口裂け女は地域おこしの立役者として、継続して来場者・来客者を集めている。

一方で、「きさらぎ駅」は、特定の場を持たないが故に、同様の発展・活用は望めないだろう。

しかし、「きさらぎ駅」に迷い込むこと、その話を提供することは、一種の集客効果が得られるのである。その根拠の一つはまとめサイトに幾度も転載されていることにある。二〇〇〇年代前半からおこった都市伝説の再流行に伴う怪談蒐集・公開という個人志向に過ぎなかったものが、今では、「きさらぎ駅」のまとめ記事一つで二〇〇〇〇〇 view を越える閲覧者数を獲得している。現在、雑誌や新聞の購買部数・テレビの視聴者数と同じように、ネット社会でも閲覧者が多いほどに広告収入があがるシステムが導入されている。その意味で、閲覧者を獲得出来ない記事やネットロアはすぐに消えるか消されるかして仕舞う。

また、Twitter における「きさらぎ駅」実況は、多くの閲覧者によってリツイート・拡散される傾向にあり、それを利用してブロガーやツイキャス主といった知名度を得たい人々によって利用された事例も見られる。先に見た、自身で釣り宣言をした投稿者は、その目的を持って計画的に投稿を行ったとされる。

六. 総括

「きさらぎ駅」は、実況系の怪異であるがそれを支えているのは、多数の掲示板や Twitter のユーザーであることは明白である。特に二〇一一年以降の「きさらぎ駅」は、多くが Twitter で投稿されたものとしている。Twitter[52] はアメリカ発祥ではあるものの、二〇〇八年に日本語版が導入される以前から、日本国内の人気が非常に高かったとされるツールである。今日では、日常的に様々な情報を発信する人々も多く、怪異表象の場としても活用されていることが今回の考察で確認出来た。

情報の共有と相互に行われる送受信、まとめサイトの介入が今後のネットロアの未来に対して重要なファクターになるのではないだろうか。「きさらぎ駅」に見られる、怪異との遭遇時の対応や考察・行動がネット社会を通して多数の人々と共有・進行される実況系怪異の傾向は、以前の口裂け女等の怪異表象から更に一歩、進んだものとして考察を進めて行きたい。クローズドサークルになりがちな怪異の表象が他者からのリアルタイムな手助けを受容していることから何が見出せるかという点も今後課題とされる。

一方で、コンテンツとして怪異表象の再利用という形で人々の興味を募ろうとする釣り主やポップカルチャーへの活用を見ると、やはり一定の恐怖・怪異の表象としての「きさらぎ駅」の存在を再考する必要があるのではないかと考える。

現在、ネット社会を舞台として、怪異の表象の在り方、知識の再生産・受容の在り方に変化が見られる。それは伝播速度・範囲・知識の方向性、そして活用に見ることが出来る。口裂け女、「きさらぎ駅」共に、現在怪異は、人を呼び込むものとしての位置付けが顕著である。また、伝播過程における様々なネット上のツールとの親和性が、その特徴といえるだろう。

再生産・再活用の面から見れば、口裂け女のお化け屋敷による集客も、その宣伝手段をwebにおいており、ネット社会と怪異の関わりを暗示させるものであるだろう。「きさらぎ駅」の大部分の情報の提示、怪異体験の報告が、現在でもネット社会において、一定の地位を維持していることは、怪異の新しい活躍の場としてみることが出来る。

現在において、怪異は手軽に恐怖と興味を満たし、人の目を集めるという表面上の価値のある裏側で、脈々と宗教的・民俗的知識の蓄積・放出の場として機能し得る点が確認される。

註

1 伊藤龍平『ネットロア　ウェブ時代の「ハナシ」の伝承』青弓社、二〇一六年　等が詳しい

2 高野誠司「都市伝説の論理と呪術」（『西日本宗教学雑誌』二二号、二〇〇〇年）八五頁

3 前掲高野　八四頁

4 三上俊治「インターネットと流言」（『現代のエスプリ』別冊　流言、うわさ、そして情報　噂の研究集大成』、一九九九年）

5 岡田朋之・松田美佐編『ケータイ社会論』有斐閣選書、二〇一二年

6 前掲岡田、二四八・二七四頁

7 飯倉義之「都市伝説とメディアの変遷―都市民俗・ネットロア・SNS―」（『こえとことばの現在　日本文芸の歩みと展望』、二〇一七年）

8 伊藤龍平「『探偵！ナイトスクープ』の「謎のビニール紐」―電脳メディアの技術史とネットロアー」（『世間話研究』第二〇号、二〇一一年）四三頁

9 伊藤龍平「ネット怪談「くねくね」考―世間話の電承について」（『世間話研究』第十八号、二〇〇八年）「続「くねくね」考―ネットロアと伝承体―」（『世間話研究』第二十二号、二〇一四年）

10 伊藤龍平「「のびあがり」と「八尺様」―電承説話の身体と妖怪」（『世間話研究』第二一号、二〇一三年）

11 米津海「インターネット都市伝説の架空性と領域」（『人間文化学部学生論文集』第一三号、二〇一五年）

12 伊藤慈晃「〈怖い話〉が投稿される時―2ちゃんねるまとめブログ「死ぬほど洒落にならない怖い話を集めてみない？」の定量分析を通して―」（『一橋研究』第三八巻第一・二合併号通巻一七六号、二〇一三年）

13 広田すみれ・高木淳「インターネット上でのネットロアの伝達と変容過程」（『東京都市大学環境情報学部メディアセンタージャーナル』第一〇号、二〇〇九年）

14 野村純一「「口裂け女」その他」（『日本の世間話』、一九九五年）

15 木下冨夫「現代の噂から口承伝承の発生メカニズムを探る―「口裂け女」を題材として」（『「現代のエスプリ」別冊　流言、うわさ、そして情報　噂の研究集大成』、一九九九年）

16 廣井脩『流言とデマの社会学』文芸春秋、二〇〇一年

17 前掲廣井　一二四頁

18 『身のまわりで変なことが起こったら実況するスレ26』http://mimizun.com/log/2ch/occult/1073411138/（二〇一七年一一月八日最終閲覧）

19 NAVERまとめ　https://matome.naver.jp/（二〇一七年一一月八日最終閲覧）
同サイトは、「あらゆる情報を、自由に組み合わせ、ひとつのページにまとめて保存・紹介できるサービス」であるとしている

20 【閲覧注意】ベストオブザベスト怖い話3「きさらぎ駅」」http://matome.naver.jp/odai/2138582343516220601（二〇一七年一一月八日最終閲覧）

21 「〝口裂け女〟本誌へ寄せられた全証言！」（『微笑』、一九七九年）

22 「ネットロア　ウェブ時代の『ハナシ』の伝承」伊藤龍平著　電脳社会介した説話」『読売新聞』、二〇一六年三月二七日付

23 国際日本文化研究センター　http://www.nichibun.ac.jp/ja/（二〇一七年一一月八日最終閲覧）

24 飯倉義之「都市伝説化する「想像力」:「大きな物語の喪失」と陰謀論的想像力」（『比較日本文化研究』第一五巻、二〇一二年）

25 野村純一「口裂け女」の生成と展開」（『日本の世間話』、一九九五年）

26 インターネット上の掲示板・Twitter等で、議論や話題を盛り上げる為に、他人が憤ったり興味を持ったりする話題を出す事や、架空の出来事を捏造し他者を騙す行為のこと

27 NAVERまとめ　「【釣り?】オカルト　「きさらぎ駅」に迷い込んだとツイートした人がいるのは西相生駅と判明」http://matome.naver.jp/odai/2145487696960968901（二〇一七年一一月八日最終閲覧）

28 NAVERまとめ　「【都市伝説】4人目!?「きさらぎ駅」に迷い込んだ人がいるらしい」http://matome.naver.jp/odai/2138893450732031301（二〇一七年一一月八日最終閲覧）

29 NAVERまとめ　「オカルト　ツイキャス主の「ななもり」さん　「きさらぎ駅」に迷い込む」http://matome.naver.jp/odai/2143955372733762001（二〇一七年一一月八日最終閲覧）

NAVERまとめ　「【都市伝説】「きさらぎ駅」6人目の被害者が現れる【ネットで話題】」http://matome.naver.jp/odai/2143955082631537101（二〇一七年一一月八日最終閲覧）

30 「都市伝説・・・奇憚・・・blog」http://yoshizokitan.blog.shinobi.jp/（二〇一七年一一月八日最終閲覧）　他複数件参照

31 伊藤龍平「続「くねくね」考―ネットロアと伝承体―」（『世間話研究』第二二号、二〇一四年）一一頁

32 前掲伊藤龍平の各論文より

33 Google検索ヒット数約四四一〇〇〇件

34 木村弘之「メディア世間と「都市伝説」現象」（『青少年問題研究』第四五号、一九九六年）三八頁

35 「都市伝説・・・奇憚・・・blog」http://yoshizokitan.blog.shinobi.jp/Entry/6142/（二〇一七年一一月八日最終閲覧）

36 早川洋行『流言の社会学　形式社会学からの接近』青弓社、二〇〇二年

37 宇佐和通『THE　都市伝説　THE URBAN LEGEND』新紀元社、二〇〇四年　一八・一九頁

38 「柳ヶ瀬に「口裂け女」？　お化け屋敷7月13日から＝岐阜」『読売新聞（朝刊）』二〇一二年五月一〇日付　他複数件参照

「お化け屋敷：柳ケ瀬商店街の空き店舗に、7月にお目見え／岐阜」『毎日新聞』二〇一二年五月三一日付

「わたしきれい？　岐阜・柳ケ瀬にカムバック　空き店舗、お化け屋敷に【名古屋】」『朝日新聞（朝刊）』二〇一二年七月一四日付

39 「「口裂け女」やってくる活性化へ2年目　柳ケ瀬・お化け屋敷、あすから／岐阜県」『朝日新聞（朝刊）』二〇一三年七月一九日付

「柳ヶ瀬に恐怖再び　お化け屋敷きょうオープン＝岐阜」『読売新聞（朝刊）』二〇一三年七月二〇日付

40 「背筋寒く・商店街熱く　岐阜・柳ケ瀬にまた「口裂け女」【名古屋】」『朝日新聞（朝刊）』二〇一五年七月二〇日付

41 「お化け屋敷：キャ～！今年も柳ケ瀬にお目見え　商店街で来月23日から／岐阜」『毎日新聞』二〇一六年六月五日付

「「口裂け女」に今夏もひやり　柳ケ瀬のお化け屋敷に記者が挑戦／岐阜県」『朝日新聞（朝刊）』二〇一六年八月一七日付

42 前掲『朝日新聞（朝刊）』二〇一五年七月二〇日付（註39）

43 「岐阜柳ケ瀬お化け屋敷：「私、きれい？」盛夏に涼「恐怖の細道」街と一体化し大盛況／岐阜」『毎日新聞』二〇一六年八月一四日付

44 「化け屋敷：1万4000人集客し終業　柳ケ瀬／岐阜」『毎日新聞』二〇一六年一〇月二日付

45 HP「岐阜柳ケ瀬「恐怖の夏祭り」公式サイト」http://gifu-obake.net/（二〇一七年一一月八日最終閲覧）

「柳ケ瀬商店街：肝試しでにぎわい復活　来月13、14日「恐怖の夏祭り」岐阜・金神社、金公園／岐阜」『毎日新聞』二〇一七年七月二一日付

「お化け屋敷　人気じわり　明治期の病院に幽霊　岐阜発祥の口裂け女＝中部」『読売新聞（朝刊）』二〇一七年八月一二日付

46 comico「呪われ男子の怪」http://www.comico.jp/challenge/detail.nhn?titleNo=5310&articleNo=1（二〇一七年一一月八日最終閲覧）

毎日更新のオリジナル作品が無料で読める、新感覚のスマートコミック&ノベルサービス

47 甘色論理「「きさらぎ駅」の駅長さん」二〇一五年　http://ncode.syosetu.com/n7274cz/（二〇一七年一一月八日最終閲覧）

48 前掲『読売新聞』二〇一六年三月二七日付（註21）

49 Pixiv 検索「きさらぎ駅」https://www.pixiv.net/search.php?word=%E3%81%8D%E3%81%95%E3%82%89%E3%81%8E%E9%A7%85&order=date_d&p=2（二〇一七年一一月八日最終閲覧）

50 クトゥルフ神話 TRPG やろうず Wiki「きさらぎ駅」http://seesaawiki.jp/trpgyarouzu/d/%A4%AD%A4%B5%A4%E9%A4%AE%B1%D8（二〇一七年一一月八日最終閲覧）

51 「謎が現実を侵食する!? 虚実を併せ呑む新型怪談の感染力」（『ムー』、二〇一五年）

52 BB Watch「Twitter 日本語版サービスが開始」2008/04/23 11:04 http://bb.watch.impress.co.jp/cda/news/21703.html（二〇一七年一一月八日最終閲覧）